

コメント2

〈モニュメント〉の可能性

西山良平

1 〈モニュメント〉の有効性

小論では、歴史や社会を有効に検討するために、〈モニュメント〉の先行研究や論点を提示する。〈モニュメント〉はヨーロッパ・アメリカ諸国や日本のヨーロッパ・アメリカ近代史研究では数多くの成果があり、日本近代史でも研究が進展する。しかし、アジア史や日本の古代・中世史では〈モニュメント〉の視角が不在であり、まずヨーロッパ・アメリカや日本近代史の成果を咀嚼しなければならぬ。また、論点の提示には多数の先行研究を総括する必要があるが、筆者の能力の限界から、代表的な研究をアトランダムに取り上げ、整理するにすぎない。まず、最初に〈モニュメント〉の語義を概観する。

モニュメントすなわち記念碑は、人物・時代・事件などを歴史的・社会的・文化的に永久に記念するために作られる「もの」である。①埋葬地の墓碑、②特定の人物の記念のため、③歴史上の事件の記念のため、に大別される。記念碑のある場所を訪れ、過去の人物・出来事を強く想起させ、過去と対話させる。記念碑には一般に石碑、記念像（彫像）、さらに記念建築がある。第二次

世界大戦後、世界各地にアウシュビッツ記念碑や広島平和記念公園など、戦没者や虐殺犠牲者の記念碑が多く作られ、訪れる人に戦争の悲惨・残虐を想起させる。

アメリカの記念碑の呼称には、記念碑 (monument)、慰霊碑 (memorial)、記念標柱 (marker)、記念プレート (plaque) などがあるが、前者二者に形態の差異は認めにくい。記念碑は勝利や匿名性を含意し、石材は概して白く、大地に高く屹立する。慰霊碑は悲しみや犠牲を表現し、死者の名を刻印する。しばしば黒く、地面より低い場合がある。アメリカのジェイムズタウンでは、メモリアル・チャーチが建立され、内部に多くの記念プレートが掲げられる。メモリアル・チャーチはそれ自体が一種の巨大な記念碑である。

モニュメントは記念碑だけではなく、記念像・記念建築など多様である。また、ジェイムズタウンのメモリアル・チャーチは、記念プレートと記念建築の組合せである。

〈モニュメント〉の視角は各国の固有の事情から発生するが、意外に共通する側面が多いと推定される。

ドイツでは、一九八九年のベルリンの壁崩壊からドイツ再統一、すなわちネーション問題の再浮上を背景に、一九九〇年代に「記念碑熱狂」とも称される研究ブームが現出する。この研究は三つの方向を示し、第一にナショナリズムの政治文化として史蹟・記念碑をテーマ化し、国民記念碑のシンボルだけでなく、建設運動や祭典などの文化行動の政治性を解明する。第二のアプローチは「記念碑倒壊」で、記念碑文化のダイナミックな展開が問題となり、政治変動に伴う破壊過程を分析する。第三は狭義の記念碑か

らさらに広義の遺産を対象とし、遺産保護の歴史的文脈を検討する。^③

日本史の領域では、近世後期の地域史研究の恰好の題材として記念碑が検討される。文化・文政期から近代の幕府代官の顕彰碑の実態、相模国鎌倉郡の玉縄首塚碑など農民の記念碑建立や石碑の造立、墓碑に刻まれた地方文人などが考察される。また、古戦場や古城跡など史蹟の記念碑を取り上げ、その社会的背景を探り、日本の記念碑文化の性格を考える。^④一方、日本の戦争記念碑は、忠魂碑や招魂碑の歴史的な背景・宗教的な性格・その場での儀式的性格を、政教分離に関する立場の相違を押し出す形で研究される。近年では、戦死者の慰霊や兵士の死を新たな角度から解明し、その際、記念碑・慰霊碑・墓碑などのモニュメントが資料として重要視される。戦争記念碑を分析し、近代の戦争・戦死者・宗教など広範な問題を理解できる。^⑤

アメリカなど、各国の〈モニュメント〉の視角の固有の背景や共通性が総括されるのが期待される。

2 〈モニュメント〉の変転

ヨーロッパ・アメリカや日本では、〈モニュメント〉は近代以降を対象に、その変遷が精緻に分析される。各国の変転を個別に概観する。

ー ヨーロッパ・アメリカなど

イギリスでは一九世紀末から二〇世紀初頭に、銅像が屋外の公共空間に急増する。ロンドンでは、ヴィクトリア時代中期以降、

さまざまな分野の偉人の記念・顕彰行為が広がり、公共空間の整備が進展する。ロンドンでは、公共空間を足掛りに真にナショナルな偉人銅像が急激に設立される。一九世紀末には、その人物を写實的に再現する制約が強くなり、ヴィクトリア時代の中上流階級の理想として提示される。さらに、設立運動や除幕式の形態・除幕式での言説など「かたち」(形態)以外の要素が、「偉人たちの記憶」の安定のため動員される。しかし、除幕式が終了すると、大規模な式典や訪問は見られず、一般の人々の不注意や無関心がうかがえる。一方、第一次世界大戦後に戦没者記念碑の設立が続き、人々の関心を集める。偉人銅像は伝統的な形態を遵守し、著名人を典型的な偉人として表象する媒体へ変貌する。偉人銅像は人々の視線を集める上で困難をはらむ。^⑥

アメリカでは、公共的な顕彰記念行為は歴史を創り出す形式で、対立を孕む場合がある。たとえば、ベトナム戦争の公共的な顕彰記念行為は、この戦争の結着の問題と絡みあい、容易に解きほぐせない。ワシントンのベトナム戦争記念碑は、ベトナム戦争とその戦後史について、多種多様な意識を投影するスクリーンとして機能する。壁に刻み込まれた戦死者の名前は圧倒的な力であるが、ナショナルリストのコンテキストでは、帰還兵が第一の犠牲者で、ベトナム人を忘却する。記念碑は物語の対立の中心に位置し、ふたつのまったく違う想起を引き起こす。ひとつはアメリカ帝国主義と男性性を復活させ、ベトナム戦争の歴史の書き換えを試みる歴史物語である。もうひとつは、帰還兵とその家族・戦死者の友人や家族など、多大な影響をこうむったアメリカ人が喪失感・傷み・徒労感などを言葉にする複雑な言説である。^⑦

中国では「碑」は春秋時代から存在し、墓碑、顕彰碑（牌坊）、記事碑、詩文碑などに分類される。墓碑と顕彰碑が近代の記念碑と最も類似するが、墓碑は死者を顕彰し、その前で記念活動（祭祀）が行われる。顕彰碑は科挙試験の成功者・地域社会の功労者などのため建てられ、その代表が牌坊である。碑の文化現象が西洋の記念碑と融合し、革命記念碑が建造される。中国の広東省は「中国革命の窓」と呼ばれ、広州は革命の根拠地として数多くの革命記念碑が建てられる。広州の革命記念碑は、第一に西洋建築と中国の古典建築が混合し、第二に形が前近代より多様化し、一定の政治理念を連想させる造形・死者の像が碑の上に立つデザインは中国の伝統に見られない。

ii 日本

近代の日本では、都市に表現を与えるモニュメントの建設、具体的には銅像の建設が始まる。江戸時代には金沢八景など八景が数多く選ばれるが、その美意識は移ろいゆく一瞬に美を感じる。モニュメントは永遠に不動を願い、その精神と八景の美意識は対極に位置する。日本では、歴史的記憶の装置は句碑や頌徳碑・墓碑など碑文である。明治以後、碑文は記念碑に衣替えし、西欧の意識を取り入れ、屋外の銅像が西洋式の技術で造られる。

一八世紀後期に記念標柱（単に事蹟の名称や所在を刻んだ石柱）を建て、史蹟の所在を確認し保護の一助とする。一九世紀には出来事や人物の事蹟を刻んで記念碑（石碑に事蹟や評価を刻み込む）を建て、業績を顕彰・継承する。一九世紀から二〇世紀初頭の地域社会では、史蹟や遺物への関心が深まり、それを探究・

考証・保存する。その歴史観では、歴史は人々の社会への功績の累積と捉え、顕著な功績を挙げた人々を顕彰する。史蹟には記念碑が大きな転機と輝きを与え、人々の関心をいっそう高める。

日本の銅像記念碑の起源は金沢の「明治記念之標」で、一八八〇年（明治一三）に完成する。ヤマトタケルの銅像を安置し、西南戦争の戦死者を顕彰する。その後、靖国神社の大村益次郎の銅像や、宮城前広場の楠正成・西郷隆盛の銅像が建立され、一八八〇年代から歴史的に著名な人物の銅像記念碑が建てられる。一八九〇年代以降、愛知県豊橋市は日清戦争を転機に地方軍都へ変貌するが、そのシンボルが巨大な戦争記念碑である。戦勝五周年を祝し建立され、上に神武天皇の銅像が安置される。日清戦争後には戦争記念碑が数多く建立されるが、上に砲弾や鷹などを安置する。豊橋の記念碑の形状・デザインは特異であるが、日清戦争は神武天皇の東征をしのぐ大事業と認識され、一八九〇年代は神武天皇が立憲国家のシンボルとして注目を浴びる。日清戦争は軍国社会形成のターニングポイントで、戦争記念碑はその象徴として存在する。

一八八〇年、兼六公園（当時）に西南戦争戦没者のために日本武尊をモチーフとした銅像を建造する。この「明治記念之標」は明治天皇が死者を顕彰し、その栄光を後世に伝え、天皇崇拜を定着させる契機となる。明治二〇年代後半以降、招魂祭が「明治記念之標」の前で開催されつづけ、顕彰と慰霊の空間の役割を果たすが、戦後、慰霊空間に復活しない。

（モニュメント）の視界は、ヨーロッパ・アメリカや中国・日本に共通して近代以降である。中国や日本では、近代以前の石碑

が分析されるが、〈モニュメント〉と交通がない。ヨーロッパや中国・日本では、近代以前に〈モニュメント〉の視角の有効性を検証する必要がある。また、近代以前の日本では、石碑や記念建築が圧倒的で、「屋外の彫像」は稀少と推定される。記念像は神社など屋内の彫像や肖像画に限定されるが、これも〈モニュメント〉に包括できる可能性がある。

中国や日本では、近代以降、石碑が「西洋」と融合・混合する。〈モニュメント〉は、近代以前はヨーロッパ・アメリカと中国・朝鮮・日本など東アジアでは差異があり、近代以降にグローバル化が進行する。また、東アジアや南アジア・イスラーム世界さらにアフリカやラテン・アメリカなど、〈モニュメント〉は地球規模で分布すると推定される。グローバル化の過程や東アジアなどの地域性が課題である。

3 〈モニュメント〉の原理

まず、〈モニュメント〉の視角を紹介する。

記念行事や銅像・まつりなど「記憶のかたち」は過去の出来事や人物を記念ないし顕彰する行為に際して成立する。記念・顕彰行為（commemoration）は文化的な生産活動として国民国家のフィクション性を構築し、記念・顕彰行為の歴史的研究が注目を集める。記憶は相対的に多様な「かたち」にテキスト化されるが、記念・顕彰行為は文字テキストと異なる「記憶のかたち」の代表である。同じ「かたち」の記憶でも、具体的なコンテキストの中で役割は大きく転変する。動員された人々が主催者の意図通りに受け入れず、単なるレクリエーションや商行為の機会に利用され

る。ヴィジュアルな「かたち」は文字テキストよりも強い印象を与え、大きな影響力を行使する。文字テキストの確立以前、記憶は装飾写本やステンドグラスなど、聞かせるもの・見せるものである。銅像も過去を豊かに描き出すと評価され、熱心に設立運動が展開される。ヴィジュアルな「かたち」が民衆文化と結びつき、非常に強く浸透する^⑮。

〈モニュメント〉は記念行事と同様に「記憶のかたち」で、記念・顕彰行為に位置づけられる。〈モニュメント〉は単体ではなく、記念行事など記念・顕彰行為と相関させる必要がある。

暴力と悲劇の景観には、個人や集団・社会全体の過去の解釈が刻み込まれる。暴力の痕跡に触発され、人々は歴史の意味の議論に巻き込まれる。暴力と悲劇の痕跡は聖別（sanctification）・選別（designation）・復旧（rectification）・抹消（obliteration）の四つの範疇に分けられる。聖別は英雄的行為や共同体のための自己犠牲など、人々が記憶し続けたいと思うような積極的かつ永続的な意味を有する。現場には永続的な維持管理を前提に慰霊碑・記念碑や庭園・公園・建物が建立され、毎年の記念祭や巡礼など顕彰行為が持続的に行われる。選別は重要な出来事の場所を示す行為であるが、英雄的・自己犠牲的要素を欠き、定期的な記念行事は開催されない。復旧は痕跡が取り払われ、通常の使用に復帰する。抹消は悲劇を覆い隠すために、あらゆる痕跡を積極的に消し去り、極力使用が避けられる。典型的な事件は大量殺人で汚名を負った場所は容易に通常の使用に戻らない。暴力と悲劇は再解釈され、場所の扱いや解釈は変化する^⑯。

国民国家の国民化のための装置には出版など様々なメディアが

あるが、記念碑はより耐久的・永続的な記憶装置である。記念碑は史蹟の景観に刻み込まれ、公的記憶の結節点であり、かつ公的記憶を再生産・変容させる。記念碑^⑧ハードには記念日など記念・顕彰行為^⑨ソフトが関わり、このソフトやハードを分析し、人々の意識の変化や記憶の形成過程を解説できる。

聖別では記念碑や建物は顕彰行為と相即的であり、選別では記念行事と照応しない。また、記念碑はハードで、記念・顕彰行為がソフトである。公的記憶は記念碑と記念・顕彰行為から分析できる。結局、〈モニュメント〉は記念・顕彰行為と並列的に考察されねばならない。〈モニュメント〉は記念・顕彰行為から分離し、容易にレクリエーションや商行為に転化する。

建築物はそれを「建てる人」の野心と不安と意欲を反映し、権力の本質や戦略・慰めなどの忠実な反映である。権力と巨大建築や〈モニュメント〉には相関関係がある。権力はまず国家や独裁者、国王・英雄である。〈モニュメント〉は国家や国王などが建造する。

〈モニュメント〉には国家や国王が介入せず、しばしば〈地域社会〉が建立する。

イギリスでは、対仏戦争後に財政・軍事国家から自由主義国家へ転換し、一九世紀以降、国家支出の記念碑建立事業は公的戦争記念碑の主流にならない。地域社会や民間団体のイニシアティブが顕著で、公的募金の建立が圧倒的に多い。ロンドンや地方都市では、国民的英雄の記念・顕彰が「都市共同体」の市民的矜持や公共精神の表現手段と認識され、都市改良と結びつきやすい。第一次世界大戦の記念碑建立では、町村・教区の小ぶりの公的記念

碑が最も際だつ。共同体のコンパクトさから、その記念碑は戦後の早い段階で建立される^⑩。

軍都の戦争記念碑は郡町村の「小さな戦争記念碑」に広い裾野を持つ。愛知県幡豆郡では、記念碑は戦死者の出たすべての町村で取り組まれ、その建立は地域社会での活動を集約する。愛知県豊橋市の地域社会と軍隊の関係では、神武天皇銅像の歓迎式や除幕式・招魂祭は、豊橋町総出の祭典で、その背景には豊橋市内・周辺町村からの建立義捐金がある^⑪。

相模国鎌倉郡の玉縄首塚碑（文政八年、一八二五）は、福原高峯・甘粕小三郎が大永六年（一五二六）の合戦供養に造立するが、その背景には福原・甘粕らをリーダーに、地域の精神文化的な交流と結合が存在する。鎌倉郡の慈眼寺境内の巡礼供養塔（安政四年、一八五七）は、福原高峯や慈眼寺僧が坂東・鎌倉・西国などの巡礼者供養のため造立する。供養塔には三浦郡や鎌倉郡・高座郡などの村々の七三名が刻まれ、建碑活動に名主層を中核に「地域民衆」の精神的結合を窺える。地域の和歌・俳句・建碑など風俗文化は、地域の文人・知識人を中心に、村役人や豪農商層が集団的に営み、その場は相互交流・結合の場となる^⑫。

近代以降や日本の近世後期に、〈地域社会〉は〈モニュメント〉を建立するが、〈地域社会〉と国家や地域の公的権力との関係が課題である。また、〈地域社会〉の〈内部〉の運動や構造がより詳細に分析されるのが期待される。

日本の古代・中世史では、〈モニュメント〉の視角は不在であるが、仮説的に論点を整理する。〈モニュメント〉は記念碑・記念像・記念建築など多様であるが、記念碑を素材とする。

養老五年（七二一）、元明太上天皇は山陵に「剋字の碑」の建立を指示する（『続日本紀』養老五年十一月庚寅条）。元明天皇陵碑は高さ三尺・広さ二尺・厚さ一尺の小型の石碑で、帝王陵の碑としてはつましやかである。唐の高宗の乾陵の無字碑の総高七メートル、碑身幅二メートルに比べて大きな違いである。日本の現存する碑は高さ一メートルから一メートル半程度、幅五〇センチ程度が普通で、中国の漢代の碑に比べて小柄である。

中国の石碑は文章を記した長方形の碑身を主体に、上部に碑首、下部に趺（碑の台石）を備える。碑首の中央に題字が入られ、両脇に彫刻が刻まれる。中国の碑は後漢時代に発生し、六朝時代にかけて定形が固まる。後漢の碑は碑首が加工され、墳墓に建てられる。一方、朝鮮では、日本より早くから五・六世紀に碑が立てられ、それが持続する。

日本古代の金石文は、刀剣・仏像・鏡・墓誌・碑・梵鐘などモノと一体の史料で、モノとの関係で文字や文章の十全な理解が成立する。金石文はモノと一体で、しばしば後世を意識した記念的な内容を持つ。七世紀半ば以降、三〇〇年余りに二〇近くしかなく、本来少ないと推定される。また、典型的な形式の碑は皆無で、多くは自然石・長方形である。日本には中国の本格的な碑はほとんど影響しない。日本では碑など石造物を作る技術が低調で、この不振は平安時代以降も変化せず、中世を通じ石碑はほとんど遺品がない。江戸時代以降、墓碑・顕彰碑・歌碑などが登場し、石碑文化を受容する。

令制では三位以上が墓を営み、碑を立てる（『喪葬令』10三位以上条・12立碑条）。日本の墓誌の副葬は、火葬の一般化と並行

して、七世紀後半に始まり、八世紀終わりには絶える。多くの墓誌は簡略で、「某之墓」の形式があり、墓碑の形式をまねて小型の墓誌を造り、副葬する。墓誌には墓地を明示・確保する役割があり、墓地を確保する意義をもつ。

天皇などの山陵には毎年一二月に奉幣するが、これが荷前である。常幣は山陵全てを対象とするが、九世紀初めには別貢幣が慣例化し、天皇の近親や外戚に奉幣する。天安二年（八五八）、十陵四墓が定められ、以後、陵数は固定するが墓の数は増減する。天皇との血縁の親疎で、陵墓は変遷する。このように、山陵など（モニュメント）に記念・顕彰行為が対応する。荷前からの排除は記念・顕彰行為の廃絶である。荷前の停止の以前と以後で、山陵などの性格の相違が課題である。また、一〇世紀初頭に氏集団の下の一門の氏墓が成立し、上層貴族層では墓参・私荷前など両親の墳墓への祭祀が出現する。一〇世紀初頭以降、貴族層の墳墓では記念・顕彰行為が発生する。記念・顕彰行為の視角は、〈モニュメント〉の変転を鮮明にする。

古代の碑の伝統は中世には廃れ、近世に盛んに作られるが、板碑や五輪塔など中世の石塔類はその空白を埋める。板碑は中世の供養塔（卒塔婆）の一つで、嘉禄三年（一二二七）から一六世紀末まで、全国各地で数多く作られる。関東地方にとりわけ多く、武蔵型板碑は埼玉・東京を中心に四万基ほどが残る。板碑は一三九〇―一四四〇年の前後に二分で、仏教的供養塔から、墓碑や月待・申待供養の板碑に変化する。横幅は原寸がよく保存され、初期には平均六〇センチ近いが、だんだん減少し、一四・一五世紀には二五センチ前後に固定する。在地領主層が主体であるが、

一四世紀には農民上層が造立に参加する。主尊や紀年名・法名だけが刻まれ、高さ一メートル・幅二〇センチ前後の板碑が数多く作られる。^③

板碑は一面では在地領主の供養塔から農民の墓碑に転化する。

在地領主は記念・顕彰行為を遂行する。中世には石碑が不在であるが、板碑は不在を十分に補完する。日本には、道祖神や磐座など、自然のままの石を尊重する習慣がある。中国と日本では、石の文化に差異があり、各々固有に発展する側面があると推定される。東アジアの内部でも、各国・各民族の異質性と共通性が課題である。^{④⑤}

〈モニュメント〉や記念・顕彰行為を古代・中世に強いて適用する必要はないが、その視角はまったく無効ではない。可能性の発見に価値がある。

小論は過半が先学の引用にすぎないが、分野が多岐でもあり、ご寛恕をお願いする次第である。

- ① 「記念碑」(横山正執筆、『世界大百科事典』、平凡社、一九八八年)。
ドイツでは、記念碑(Denkmal)は①墓記念碑、②名誉記念碑、③戦争・講和など事件記念碑に分類される。①は古くからあり、②はオリンピック勝者像など古代に多く、中世にはまれ、ルネッサンスで復興する。フランス革命以後盛んになり、碑文・肖像メダル・胸像など形態は多様化する。③も現在では、碑文・レリーフ・凱旋門・奉納教会堂など多様である(一九〇三年版『マイヤー百科事典』)。若尾祐司「近代化と歴史意識」(若尾祐司・羽賀祥二編『記録と記憶の比較文化史——史誌・記念碑・郷土——』、名古屋大学出版会、二〇〇五年)による。

- ② 和田光弘「記念碑の創るアメリカ——最初の植民地・独立革命・南部」(『記録と記憶の比較文化史』前掲)。
③ 若尾祐司「羽賀祥二「史蹟」(名古屋大学出版会、一九九八年)によせて」(『歴史の理論と教育』一〇六、一九九九年)。
④ 羽賀祥二「史蹟論——一九世紀日本の地域社会と歴史意識——」(名古屋大学出版会、一九九八年)。
⑤ 本康宏史「軍都の慰霊空間——国民統合と戦死者たち——」(吉川弘文館、二〇〇二年)。
⑥ 光永雅明「銅像の貧困——一九二〇世紀転換期ロンドンにおける偉人銅像の設立と受容」(阿部安成ほか編『記憶のかたち——コメモレイションの文化史』、柏書房、一九九九年)。
⑦ マリタ・スターケン「アメリカという記憶——ベトナム戦争、エイズ、記念碑的表象」(未來社、二〇〇四年)。
⑧ 王曉葵「二〇世紀中国の記念碑文化——広州の革命記念碑を中心に」(『記録と記憶の比較文化史』前掲)。
⑨ 鈴木博之「見える都市/見えない都市——まちづくり・建築・モニュメント——」(岩波近代日本の美術3、岩波書店、一九九六年)。
⑩ 羽賀祥二「史蹟論」(前掲)。
⑪ 羽賀祥二「軍都の戦争記念碑——豊橋第十八聯隊と神武天皇銅像記念碑——」(田中彰編『近代日本の内と外』、吉川弘文館、一九九九年)。
⑫ 本康宏史「軍都の慰霊空間」(前掲)。
⑬ 小関隆「コメモレイションの文化史のために」(『記憶のかたち』前掲)。
掲。記憶は現在の状況に合わせて過去の特定の出来事に意味を与える行為と理解される。雑多な記憶のうち、「公共の記憶」は家族や国民国家など共同体の共同性を有効に保証する過去の認識として認知される。近代以降、公共の記憶はしばしば「ネイションの物語」を語る

機能を担う。

- ⑭ ケネス・E・フット『記念碑の語るアメリカ——暴力と追悼の風景——』（名古屋大学出版会、二〇〇二年）。
- ⑮ 和田光弘「記念碑の創るアメリカ」（前掲）。
- ⑯ デイヤン・スジック『巨大建築という欲望——権力者と建築家の20世紀』（紀伊國屋書店、二〇〇七年）。
- ⑰ 小島崇「近代イギリスにおける戦争の記念・顕彰行為——対仏戦争——第一次世界大戦の記念碑」（『記録と記憶の比較文化史』前掲）。設置場所は公共空間で、推進主体の記念委員会は除幕後に記念碑の所有権などを市自治体に移譲する。また、記念委員会は市長主宰の公開集会で任命され、市長や市会議員・地元の実業家などが多く加わる。
- ⑱ 羽賀祥二「日清戦争記念碑考——愛知県を例として——」（『名古屋大学文学部論集』史学四四、一九九八年）、「軍都の戦争記念碑」（前掲）。
- ⑲ 石井修「幕末期の地域結合と民衆」（『関東近世史研究』二二、一九八七年）、石井「東海道沿いの文化人——藤沢宿及び周辺農村を舞台に——」（『関東近世史研究会編』幕末の農民群像——東海道と江戸湾をめぐって——、一九八八年）。
- ⑳ 福山敏男「古碑」・「元明天皇陵碑」（『中国建築と金石文の研究』福

山敏男著作集六、中央公論美術出版、一九八三年）。

碑文は「大倭国御谷（添上）郡平城ノ之宮歌岑（宇）八側（洲）ノ太上天皇之陵、是其ノ所也ノ養老五年歲次辛酉ノ冬十二月癸酉撥（朔）十ノ三日乙酉葬」（『東大寺要録』卷八「裏書」）。

- ㉑ 以上、東野治之『日本古代金石文の研究』（岩波書店、二〇〇四年）。
- ㉒ 服藤早苗「墓地祭祀と女性——平安前期における貴族層——」（『家成立史の研究』、校倉書房、一九九一年）。
- ㉓ 千々石到『板碑とその時代——てちかな文化財・みちかな中世——』（平凡社選書、一九八八年）。
- ㉔ 千々石到『石の文化』（岩波講座「日本通史」中世3、一九九四年）。日本の中世の石碑には、京都市嵯峨二尊院の空行状碑、宮城県松島町の頼賢行状碑、大阪狭山市出土の狭山池改修碑などがあり、空行状碑や頼賢行状碑は外形や制作者などの点で、中国との関係がきわめて深い（千々和到『板碑と石塔の祈り』、日本史リブレット、山川出版社、二〇〇七年）。また、柳生の徳政碑文は通称抱瘡地蔵と呼ばれる地蔵石に彫られるが、この地蔵石は花崗岩の巨石である。その正面に地蔵菩薩像が浮彫りされ、徳政碑文は地蔵の右に枠を刻み、その中に彫られる（勝俣鎮夫「柳生の徳政碑文——「以前」か「以後」か——」（『歴史と地理』「日本史の研究」二二六、一九八四年）。

（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）